
真・恋姫?無双 中華統一

TONP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫？無双 中華統一

【Nコード】

N9034T

【作者名】

TONP

【あらすじ】

主人公である北郷一刀が飛ばされた先は三国志！？でも武将はみんな女の子だけという事なの？！中華統一までの道程は果たしてあるのだろうか？

と、恋姫の二次創作物です、恋姫には登場しない武将などもです。生暖かく見守ってってください。

北郷一刀（前書き）

勢いで投稿、後悔はしていない。

北郷二刀

壺

林に一人の少年が立っている、齢は17，8だろう。

白の袷着に紺袴そして腰の左側に2本の刀を佩^はいていた。

一つは長く、一つはそれよりも短い。

「打刀^{うちがたな}」と「小太刀^{こたち}」だ。抜かれる事も無く鞘に収まっている。

少年は月明かりが僅かに射し込む中、目を閉じ静かに佇んで何かを待つ。

微風が吹いた

不運にも風に耐えきれなかった一枚の葉がゆっくりと落ちてくる

ひらひらと少年の前に舞い落ちる葉は

キン

と、耳に残る音と共に両断された葉の先には長い刀を抜き放った少年の姿があった。

2秒ほどその体制のままだっただろうか、不意に静寂を破る音が響く。

「かずピー凄いなあ！そないな事ができるなんて知らなかったわ！」

言いながら近づくもう一人の少年

「おいかわ及川か…」

「なんやかずピーいけずやなあ、夜中に寮ぬけだして何してるのか
思ったらこんなことしてたなんて」

「別に秘密にしてたわけでもないさ、日課だし」

「それより何か他にも型？みたいな無いん？見たいみたい！」

「あまり見せるものはないよ、それに今日はこれで終わりにしよう
と思ってたし」

「ああん！かずピーのいけずう…」

「そこでしなを作るな！気持ち悪い！ほら帰るぞ！」

「ま、しゃーないか」

少年達は笑い合いながら林の入口に消えていく

袴の少年の名は北郷ほんごう一刀、この物語の主人公である。

翌日学園から寮へ続く帰宅途中の通学路での事だった

一刀は後ろからかかる声に振り向いた。

「かずピー！まってえや〜！」

級友であり隣室でもある及川が走って追いかけてくる

「起こしても起きないお前が悪い」

「それでも起きるまで待ってくれるのが親友やんか」

「誰が親友だ、誰が」

などと軽口をたたき合いながら寮へ歩み始める。

「でも昨日のかずピーは凄かったなあ」

若干興奮気味に及川は話し始めた。

「そうか？俺なんてまだまださ、いまだに80過ぎの爺さんに全力出さなきゃ勝てないんだから」

「そんな化け物みたいな爺さんいるんか？」

「いるよ、ありゃ妖怪だ妖怪」

ため息をつきながら一刀は手をひらひらさせる

「家の爺さんなんだけどな、俺の育ての親でもあるんだけどさ」

「育ての親？」

「ああ、俺の両親は俺が小さい頃に死んでるんだよ、言ってなかったっけ？」

「そんなん初耳やで！」

まあまあと手で及川を宥めながら一刀は続ける

「それで爺さんに預けられてさ、教育の一環だとは思うんだけど剣を教えてもらってる訳。ガキの頃からやってるから何か日課になってるんだよなアレ」

「ふうん、かずピーも色々あるんやなあ」

及川はそこまで話してくれれば十分と、そこから先の事は聞いてこなかった。

「なあかずピー自分がどのくらい強いのか確かめなくなった事ってあるか？」

ふと及川が切り出した一言に一刀はすぐに答えを返す事が出来なかった。

そしてその場は曖昧な返答でごまかしさつさと話題を切り替えたのであった。

部屋に戻った一刀は制服を着替えなままベッドに転がった。

そのまま目を閉じ先程及川に投げかけられた問いを思い返す

自分はどのくらい強いのか？

それは一刀が度々考えている事であった。

一刀はこれまで真剣を用いた修練を積んできた

少しでも扱いを間違えれば相手も傷つくし何より自分も傷つく、しかも傷つくと次元が違うのだ、失明や部位の切断など人生を左右する怪我なのである。

7

ケンカをしたこともある、だが相手は一刀からしてみれば素人だった空手をやっている、柔道をしている、剣道をしている、色々な者がいた。

しかしいずれも『やっている』だけであり、本物はいなかったのだ。

自分は本物相手にどこまでやれるのか、勝つのか？負けるのか？

本物を探すことが困難なこの平和な時代において彼のその思いを果たすことは難しい

考えても結論は出ず、そのまま一刀は眠りに落ちて行った：

（なんだ…？）

一刀は妙な気配を感じ目を覚ます。

ぬるりとした感覚が全身を覆っている、危険なのかそうでないのか判断がつかない

（まずは刀だ）

周囲に気をやりながら一刀は慌てずに素早く二本の愛刀を腰に佩く

制服のままだが仕方ない、緊急時だと感覚が告げている

人の気配は無いただ空気だけが体にまとわりついてくる

何事にも対処できるように構えてからどれくらいの時間が経ったのか

外の様子を窺うが何もなく勘違いかと気をそらしたとき、室内に風が吹いた

風を感じた一刀が振り向いた部屋の中央に僅かに光を放つ鏡が現れていたのだ。

（さっきまでは無かったはずだ）

時代がかったその鏡は光を一瞬収めた後、目も開けられない程の爆

発的な光を放った！

思考を巡らせる間もなく一刀は意識を沈められていく

光が収まった後には元の静寂を取り戻した部屋があった、主が不在のまま：

弐

蠟燭の明かりが灯る室内で書き物をする女性の姿がある年の瀬は28程だろうか

書き物にでも区切りがついたのだろう、一息つくと窓から見える空をそっと見上げた

「世に動乱の気あれど、天はいまだ事も無し：まだその時ではないと星は告げている、噂に伝え聞く天の御遣いも現れず：か」

彼女はそのまま蠟燭を吹き消し寝台に潜ろうとしたその時、室内が突然明るくなった

蠟燭の光ではない、仙術や妖術とも判断がつかない光が窓の外から室内を照らしている。

「天より光を伴い落ちる流星と共に来る者、それすなわち天より来たりし天の御遣い也」

かつて伝え聞いた言葉をつぶやいた彼女は今の光を探るために身支度を整えた時扉を叩く音を聞いた

「先生ー！先生ー！おきていらっしやいますかあー？！」

「あのあの！光が、光がバーってなって！」

「しーっ！二人とも落ち着いてってば！みんな起きちゃうよ！先生だって寝ていらっしやるかもしれないし…」

あの三人娘だろう、こんな時間まで起きていた事を注意してやらなければいけないがそれは後だ

扉を開けると予想通りの少女達がいた

「三人とも落ち着きなさい、はい深呼吸！」

少女達は大きく息を吸って、吐くそれを二度、三度

「落ち着いたかしら？」

三人はコクコクと頷きを返す。その様子に笑みを返した彼女は

「三人の言いたい事は解るから無理に話さなくてもいいわ。今から様子を見に行くから付いていらっしやい、ただし静かにね」

自分の口元で人差し指を立て悪戯娘の様な笑みをこぼした後、自室を後にした。

光は自分の部屋のすぐ外だったように思う

彼女は判断に迷わなかった、迷わずに自室のすぐ外に回ったそこには

「はわわ」

「あわわ」

「男の…人？」

月明かりを受け純白に輝く服を身にまとい二本の棒状の物を腰につけた男が横たわっていた。

「天の…御遣い？」

彼女の僅かなつぶやきに答える者は…いない…

北郷一刀（後書き）

風呂敷を広げてしまったからには完結できるように頑張ります。
感想などをお願いします

水鏡（前書き）

会話だけ

水鏡

壺

「どこだ…ここ？」

北郷一刀は部屋を見渡しながらそう呟いた

そこはいつも見知ったコンクリート造りの寮の部屋ではない、土でできた壁に囲まれた部屋だった。

「確か昨日は、及川と帰ってそのまま寝て…光？」

ぼんやりと記憶を遡りたどり着いた結論は

「誘拐…が一番妥当な線か…な？」

解らない…何が自分に起こっているのか、自分は今どういう状態なのか、もし誘拐ならばなぜ自分は自由な体を動かせるのか

「名前は北郷一刀、聖フランチェスカ学園1年、家族構成は爺さん一人だけ、剣を少しかじって…！」

一言一言確かめるように自分の事を口に出して確認した所である事に気がついた

「無い…」

昨日腰にあった物が無い、確かにそこにあったはずなのに

「何処に」

辺りを見回すが見当たらない、一刀が焦りを覚え始めた時、視線が扉を向いた

静かに扉が開いたからだ、その隙間から見知らぬ少女が顔をそっと出した

「おじゃましまーす」

少女は部屋をぐるりと見る、自分がいるのは扉の内側の方になるので視線が来るのは一番最後だ

「はわっ！」

視線があった、瞬間少女はビクリと視線を合わせたまま硬直した

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が流れるが二人とも目が離せない、そのまま一分ほど経っただろうか

「はわーーーーー！先生！目覚められましたー！」

少女は脱兎のごとく駆け出して行った。

一刀はただ呆然となることしかできなかった。

「はじめまして、私は『司馬 徳操』皆からは水鏡と呼ばれています。」

部屋に入ってきた女性は一刀と二言ほど言葉を交わすと、そう切り出した。

「俺は北郷一刀と言います。」

「北郷？聞かぬ名ですね、失礼ですがお生まれは何処？」

「日本の東京です。」

「にほん？とーきょー？それは何処の州かしら…それとも邑？」

日本の東京で通じない事がある時点で一刀は信じられない

目の前の女性…水鏡と言っただろうか、水鏡は本気で悩んでいる。

演技には見えない、見えないが東京の意味が通じないなんて自分は何処の辺境まで来てしまったんだろうか？

「すみません、こちらからお聞きしたい事があります。」

意を決して一刀は切り出した

「ええ、どうぞ」

「俺から聞きたい事は二つです、まずはここが何処なのか？」

「ここは劉表殿が納める荊州にある水鏡塾と言う私の私塾です。」

一刀はいきなり頭を抱えたくなったが、実際に行動に移す事もなく次の質問を切り出した

「次にどうして俺はここににいるのか？」

「貴方は天より飛来した流星の光に乗って、この水鏡塾の庭に落ちてきたのです。」

今度は本気で頭を抱えた。

（荊州……って事は中国だよな……でも荊州ってもつと昔の名前じゃなかったか？……待てよ、さっき水鏡さん司馬って言ったよなそれに劉表って名前も言った……まさか）

一刀は水鏡を見た、水鏡は黙って値踏みするようにこちらを見ている。

「落ち着いたかしら？」

「はい、いきなりですが俺の推論を聞いてもらってもいいですか？」

「推論？」

「ええ、俺が自分に納得をさせるために出したものですが。」

暫く黙考した水鏡は

「いいでしょう」

そう答えたのだった。

式

「貴女に警戒されるのを承知でお聞きます。貴女はここで私塾を開いているとおっしゃいました、貴女の教え子の中に諸葛孔明と鳳士元と言う生徒はいらっしゃいますか？」

瞬間、部屋の空気が変わった。否、変えられたのだ水鏡によって。

「いきなりすぎたとは思いますが、貴女の反応で確信が持てました。荒唐無稽な話ですがやっぱり事実なんでしょう。」

「どういう事です？」

「俺は貴女の事を知っています、正しくは貴女が何を成したかです
が。」

「私が何を成したというのです？」

「それは俺の口からは言えません、孔明、士元両名の名前を知っていたのもそのためです、貴女達は歴史書に名が載るほどの人物ですから」

「歴史書？私が？それは何かの間違いよ、私は今こうして生きているのだから」

「ええですから、貴女達が歴史書になる位先の未来から僕はやってきたみたいです。」

その先も理解できない話が続くが、水鏡が理解する事を諦めようとはせず彼女は話を聞き続けた。

理由はある、理解しがたい話ではあるが一刀と名乗った少年は自分でも理解できない状況で現れたのだ。

更には自分でも理解できない知識を持ち、何でできているかもわからない光輝く服を身につけ、二振りの美しい宝剣を持つ

これを天の御遣いと言わずして何と呼べばいい？

天の御遣いと一刀を頭の中で結びつけた水鏡の心の中で変化が起った、目が離せなくなったのだ。

堂々と話を続ける一刀に水鏡は胸の高鳴りを確かに聞いた。この一刀という少年には魅力がある、人を惹きつけるだけの器量がある。

彼の叫びに答える者は…いない

水鏡（後書き）

会話だけのパートですw

いきなりオリキャラ出したけど大丈夫か？

「大丈夫だ、問題ない」

真名（前書き）

駆け足モードの回ですよー

真名

壺

カッ……カッ……

規則正しく木片を断ち割る音が響く、ここは水鏡塾の庭先だ
そこに白の袷着に袴姿の一刀の姿があった。

一刀は平らに整えられた切り株を台にして薪を作っていた。

一区切りついたのだろう、鉈を立て懸け切り株に腰をおろす

「ここに来てもう一月かあ…あっという間だな」

晴天の下でそう呟く、あの水鏡の臣下の礼からもう一月だ

あの時の事は何度も思い出す程覚えている。

「ちよっ、ちよっと待ってください！天の御使いつて…どういう事
なんですか?!」

「言葉通りの意味です、貴方様はこの世に泰平をもたらすために天
が遣わした天の御遣い様だと私は思います。」

頭が混乱していてまともな判断ができない、天下泰平？そんな大仰な事一介の学生にできるはずない…でも

「俺は…貴女の期待に応えられるとは思いません」

「いいのです、私がそう信じたのです」

え？と一刀は水鏡に顔を向けた、そこには一刀を見つめる瞳が二つ。

「貴方様は先程私に器量を示されました、私は貴方様に魅かれたのです。」

ふわり、と水鏡は笑みをこぼした。一刀は目が離せない、この女性は何て気持ちのいい笑みを自分に向けるのだろう

そして気がついた、自分の目の前にいるのがとんでもない美人だという事に。

「う…」

思わず目を逸らしてしまった。

「どうかなされたのですか？」

「いえ、少し待っていただけますか」

深呼吸を一度、二度

自分はこんなにも魅力的な女性に期待を投げかけられた、しかも少しの時間しか話をしていない。

自分はこの人に何か返せるだろうか？否、返したいと思う。

強がりでもいい、この女性の期待に答えたい。

「水鏡さん」

「はい」

「俺は未熟者です。自分では天の御遣いなんて相応しくはないと思います。」

一呼吸の後に一刀は続けた

「でも俺は貴女の期待に応えたい、そのために貴女に力を貸してほしい」

そして静かに膝立になり手を差し出した

「もし力を貸していただけるのならこの手を取ってください」

数秒の沈黙の後、謡う様な声が響いた

「私、司馬 徳操は天の御遣いたる北郷 一刀様に忠誠と助力を誓う事を宣言致します。誓約の証として私の真名を一刀様にお預けいたします。」

そして一刀の手を両手に包み高らかに告げた。

「私の真名は…千歳^{ちとせ}、この名一刀様にお預け致します。」

式

青空を見上げながら一刀は呟きを漏らした

「真名か…」

真名はその名を持つ個人を表す言葉であり、親しき者でも許されない限りは、知っていたとしても決して呼んではいけない大切な名前だと教えられた。

千歳は大切な物を自分に預けてくれたのだと、この一月程で実感した。

基本的に二人きりの時以外は一刀も『水鏡さん』と呼んでいる。

つまりは千歳の真名を知っているのは一刀のみと言う事になる。

水鏡塾の生徒や近くの村人たちは全て『水鏡先生』だ。

水鏡塾で学んでいる生徒達どうしでは真名で呼び合ったりしている者も少なくはない。

やはり千歳は真名をととても大事にしているのだろう。

そんな千歳の真名を知っていると言う事実が、嬉しくもあり誇らし
くもある。

自然と気分が高揚してきた一刀は

「一刀さん、何がそんなに楽しいんですか？」

「うおわぁ！」

いきなり現実に戻されてひっくり返るのだった。

「ってて…藍里あじりかぁ…驚かせないでくれ」

「ふふふっ、隙有りですね一刀さん」

「本当に吃驚したよ、恥しい姿見せちゃったな」

笑顔を一刀に向けながら藍里と呼ばれた少女は少し舌を出して

「今度お詫びに、お菓子を作りますね」

と、手を差し出してきた。その手を取って立ち上がった一刀は

「ああ、それは楽しみだな」

「楽しみにしててくださいね！腕によりをかけちゃいますから！」

腰まで伸びる銀の髪をくるりと舞わせながら彼女は笑った。

「朱里しゅりと雛里ひなりはどうしたんだい？」

「朱里ちゃんも雛里ちゃんも寝てますよ、本当は私も一緒に寝てたんですけど私だけ目が覚めちゃって」

『朱里』、『雛里』、『藍里』

それぞれ『諸葛孔明』、『鳳士元』、『徐元直』の真名である。

彼女達の真名を一刀が預かった事には理由がある、その理由も忘れることはできないだろう。

…自分は人を殺めてしまったのだから

参

その日、水鏡塾に村の男が訪ねてきた

「村の近くの森に賊が数人住み着いてしまった、村にやって来ては強盗まがいの事をして去っていく、村人にも重症者が出てしまい、執政者に嘆願に行ったが取り合ってもらえない。知恵を貸してほしい」

との事であり水鏡はなんとかしてみましょと引き受けたのだった。

一刀、朱里、雛里、藍里を伴って村に赴いた千歳の行動は素早かった。村人から情報を集め、次に狙われそうな複数の候補の家に罠を仕掛け、村人全員を一晩避難させる

そして次の日に様子を見に行くとそこには複数の死体があった。

罠にかかった賊の姿であった。千歳を除いた四人は目を背けそうになったが、それを千歳は許さなかった。

「四人ともこの光景を忘れてはなりません、敵に策をかけると言うのはこういう事です。軍師として敵を策にはめた時はこの何倍もの人が死ぬのです」

全員が千歳を見つめる

「ですが人を殺める事に慣れてしまっただけじゃありません、そこに疑問を持たなくなるとそれはただの破綻者になってしまいます。」

千歳はなおも続けた

「この感情に折り合いをつけられるようになりなさい、貴方達はこの世に飛び立っていくでしょうその時に必要になるはずです。」

朱里、雛里、藍里が頷きを返そうとしたとき奇声が上がった

罠を危うく逃れた賊の頭角らしき男が千歳達に迫ってきたのだ

距離を置こうとした五人だったがその中で雛里が足をもつれさせて転んでしまった。

そこから先は夢中だったのか一刀はあまり覚えていない、気がついたときには手に残る自分の刀が肉を
割いた感触と足元に転がる頭目の亡骸があった

その後もどうやって水鏡塾に帰ったのかも覚えていない
ただただ泣いていた事だけは覚えている。

その晩千歳が部屋に訪ねてきた。

憔悴している一刀を見て、千歳は優しく一刀の頭を抱いた

「大丈夫、貴方は私の教え子を守ってくれた、道に外れた事はして
いない」

一刀の頭を撫でながら

「たとえば貴方が道を踏み外しそうになっても、貴方の周りにいる人
達が、そして私が元の道に導きま
す。貴方は貴方の正義を守って生きて」

その言葉を聞きながら一刀は眠りに落ちて行った。

その次の日から一刀は、朱里、雛里、藍里の真名を呼ぶ事になった

のだった。

四

「二刀さん、あの日の事を考えてたんですか？」

物思いに耽っていた一刀を現実に戻したのは、またしても藍里の声だった。

「心配してくれたのか？ありがとな」

くしゃっと一刀は藍里の頭を撫でた

「何ででしょう？子供扱いされてる気になります…」

「あつとすまん、藍里って可愛くてつい撫でてやりたくなるんだよな」

「か、かわっ！」

一瞬でゆでダコ状態になった藍里は一刀から背を向けて走りさってしまった。

そこには呆然となった一刀だけが取り残されていた…

あくる朝、一刀は千歳の部屋に行きこう言った

「旅に出ようかと思えます。」

真名（後書き）

駆け足な上に超展開…救いようがない…

次回はまともなはず…

（ネガティブスパイラル中）

孫策

壺

森にこだまする劍戟けんげきの音がある、それは一つではない数え切れないほどの数だった

その中に混じる二種類の声がある、一つは雄叫びもう一つは

「ぎゃあ!」、「た、助けてくれ!お願いだ!」、「し、死にたくねェよ!」

恐怖に怯える絶叫だった。

「徹底的にやるのだ!一人も逃がすな!逃がした者はまた我等が愛するこの地を脅かす事になると思え!」

その中に一際響く声があった、薄桃色の髪を後ろに短く切り揃えた齡にして35程の女性が剣を持ち号令を発している。

「敵が死に体だからと言って気を抜くなよ!全力で当たれ!」

「堅けん殿ー!こちらにおいでか!」

「おお、祭まつりかどうした?」

弓を持った女性が走り寄ってくる。

「策殿さくが一人で討ち漏らした賊を追って行ってしまったらしい、眼の色が変ったようで部下では止められなかったと言っておった」

「冥琳めいりん、いるか?！」

「お側に」

漆黒の髪を揺らして一人の少女が現れた

「今から私はあの馬鹿を迎えに行く、後は任せた…できるな?」

「御意に、この周公謹しゅうこうきん、孫堅そんけん様の御命令見事果たしてご覧にいます。」

「好し、皆の者! 私はこの場を離れる、後はこの公謹が継ぐ! 公謹の命は私の命だ! わかったな!」

『おおっ!』と、周囲にいる兵隊から返答が来た。一つ頷きを返した孫堅と呼ばれた女性は

「それでは行く、祭! 案内しろ!」

「応!」

祭と呼ばれた女性を先導に走り始めた。

森の中を二つの影が距離を開けて走っている、一つは男。歩幅は一定でなくもう一つの影から逃げるように走っていた。

「ちくしょう！もう少し行けば！」

もう少し行けば川があるそこには罠がはってある！時間稼ぎになるはずだ！

彼はその一心で逃げ続ける

もう一つの影は少女だ、薄桃色の長い髪をなびかせ無言で男を追いかけていた。

体が乾いている、もっと熱くなりたい…もっと…もっと！

身体が闘争を欲している、敵を屠れと疼いている

そして彼女は速度を上げた。

『ひ』とも『い』ともとれるような声で男は走り続けたが、体力の限界だったのだろう足をもつれさせて派手に転がった

その数秒後、声を上げることも許されずに彼の命は失われた。

乾きが収まらない、激しい戦いの後はいつもそうだ

身体が何かを欲して止まらなくなる。

いつもなら白に戻るまで我慢が出来る、でも今回は我慢できない。
疼きが止まらない、体の熱が上がっていく。

冷まさなければ…確か近くに小川があったはずだ…

彼女は再び走り始めた

森を二人の将が駆けている、孫堅と祭だ

「だいぶ遠くまで来たが、あの馬鹿娘め何処まで行った？」

「堅殿、あれを！」

走る二人の前に一つの亡骸があった。

「まだ新しい物のようすな」

「ああ、こんな所まで深追いしよってからに！後でお仕置きだな」

楽しそうに笑う孫堅の横で、祭は足跡を調べている。

「この先にある小川に向かって足跡が続いておりますな。」

「よし、追うぞ」

二人は足跡に沿って、再び走り始めた。

式

小川の脇でゆっくりと腰を落ち着けている一人の少年がいる

「もう呉の領地に入ってるはずだよな…」

一刀だ、傍らには馬が繋がれている。

「千歳は快く送り出してくれたけど、藍里達はカンカンだったな」

千歳に旅に出る旨を伝えると、千歳は賛成してくれたのだった。

少し反対されると思っていた一刀は拍子抜けしたまま千歳に言われた。

「そこまでしっかりと考えられて決意した事ならば私に意はありません。」

と本当にあっさりと旅立ちが決まってしまったのだ。

そこに反対したのが藍里、朱里、雛里の三人だった

朱里と雛里は

「そんなに私達と一緒にいたくないんですか!？」

と泣きそうになっていたし藍里なんかは

「お菓子作ってあげるって言ってたのに!そんなに私のお菓子食べたくないんですか？」

と、もう無茶苦茶だった。

何とか三人を説き伏せ（自分ではよくもまあ三国志の英傑である三人を説き伏せられたものだとは思っている）た後、すぐに旅立ったそこから身辺整理などの旅立ちの準備をして、旅立ったのが三日前呉領に入ったのが昨日だ。

服は袷着に袴の旅衣装で来た、制服は目立ってしまい盗賊やゴロツキに絡まれやすいと思ったからだ。

制服は千歳に保管してもらっている。

「後は川に沿って森を出たら少しだから、頑張ってくれよ」

馬の頭を撫でながら一刀は腰を上げたその時

がさり

と葉を踏む音がした

少女がやっこの思いでたどり着いた小川で見たものは一人の少年だった。

白の袷着に紺袴、腰には見た事も無い形をした剣が二本下がっている。

自分と年は同じ位だろうか？背恰好も自分と同じか少し高いだけだからおそらくそうだろう、しかし

何故私はこの少年から目が離せないのだろうか？速く…カレガ欲しい…水を飲みたいのに

今私は何を考えた？、彼ならこの疼きを止めてくれるかもしれない…一度自覚した思いは止まらずに一つの想いが支配していく

彼が欲しい

見つめたまま何一つ話さない少女に少年は声をかけた

「大丈夫ですか？酷い顔をされていますよ」

瞬間、少女の理性は完全に崩壊した

一刀はとっさの出来事ではあったが、行動を過たなかった

馬から離れるように横に大きく跳んだのだ、数瞬遅れで元いた場所に風が吹いた。

風の正体は少女だ、

（様子がおかしいから声を掛けたただけなのに何で襲われるんだよ！）

少女は間髪いれずに一刀に再び襲いかかってきた。

「ちょっと待って下さいよ！」

反応はかえってこない

（問答無用かよ！）

彼女の突撃を何度かわわした頃に一刀は考えていた

（この人は『本物』だ）

肌をはしるこの感じ、心臓を圧迫するこの圧迫感！

まぎれもなく彼女は本物だ、しかも飛びきりに違いない

しかし

（何で、目が正気を失ってるんだ？）

彼女の目は何かにとり憑かれたように一刀だけを追っている

まるで子供が取り上げられたおもちゃを必死で追いかけているようなそんな感じがした。

（少し目を覚ましてもらわないと話もできない…なっ！）

一刀は少女の突進をかわしながら小川の中に立ち

「さあ、俺はここからもう逃げないから…おいで」

まるで子供の相手をするようにそう言った。

彼女は一刀に飛びかかっていく、それは獲物を襲う虎のようだった

一歩、二歩、三歩目で小川脇の石に足がかかる、そして飛ぶ

彼女が自分に近づいてくる光景が一刀にはゆっくり見えていた

そして彼女の両手が届きそうなその瞬間

一刀は彼女の片腕を取りその勢いのまま背負って川の中に叩き込んだ。
だ。

（冷たっ！、いったあ！）

少女が気がついたとき初めに思ったのはその二つの事だった。

（何？何が起こったの！？）

「目、覚めました？」

混乱する少女に男の声がかかった、振り向くと男の顔がある

「貴方…誰…？」

これが、この後江東の小霸王と呼ばれるそんざくはくふ孫策伯符と一刀の出会いの一言だった。

孫策（後書き）

4話になります。

注釈としては雪連の暴走はこれだけです、以降は理性を無くすほどの昂りはありません。
呉編のスタート回です。

孫堅（前書き）

約二週間あきました…

今回の話は支離滅裂と言うか…自分でも何書いてんだかって感じになっちゃいました…

では生暖かい目で見守ってやってください。

孫堅

壺

「貴方…誰…？」

孫策はきよとした顔で一刀を見ていたが自分の状態に気がつく
とすぐに表情を変えた。

「賊か!？」

警戒をその顔に移しながら剣に手を当てる。

「待って待って! さっき何があったのか覚えてないんですか？」

「何を言うか!」

「貴女は先程いきなり飛びかかってきたんですよ?」

孫策は疑いのまなざしを向けながら

(何を世迷言を…)

「その通りだ! さがれ伯符!」

「母様!」

孫策と一刀は声がした方に視線を向ける。

そこにはため息をつきながら微笑みを浮かべた孫堅と矢をつがえた弓を構える祭がいたのだった。

小川脇の森の小さな広場で一刀は三人の武将と思わしき人物と相対していた。

「そなたにはウチの娘が失礼した、許せ」

三人の長と思わしき女性が一刀に頭を下げる。

「母様！」

「堅殿！」

他の二人に構わずに女性は続ける

「一部始終は見させてもらった、とは言ってもここにいる伯符が前に飛びかかる辺りからではあるがな」

言いながら一刀に飛びかかってきた少女に拳骨を落とす

「痛ったあゝ！」

「それは勝手に隊を飛び出した罰だ、甘んじて受けろ」

ケラケラと笑いながら女性は続けた

「さて、少しお前に聞きたい事があるがいいか？」

「俺に答えられる事なら、何でも」

女性は一刀の腰を指差して言った

「何故抜かなかった？お前の腰にある物は飾りではあるまい、見た事はないがそれは剣であろう？」

「抜かれなかったから…ですね。」

「なんじゃと？それだけの理由か？」

即答した一刀に、弓を持つ女性が驚きを隠せずに言う

「この時世にそんな甘い考えでおっては死ぬぞ、お主相当の馬鹿者か！？」

「そうかもしれませんね」

「『剣を抜かれない限りは何とかできる』なんて事を思っていないかったか？」

一刀の表情が驚きへと変わる

「そうか…自制がきいていなかったとはいえ雪蓮を相手にしてその余裕か…面白い奴だな」

くっくつと喉を鳴らしながら女性は笑う

「面白い奴だ…私の名は孫堅、孫文台だ。この孫呉を納める立場に

いる。お前の名は何と言う？」

一刀に笑顔を向け孫堅は答えを待つ

「俺の名前は北郷、北郷一刀」

「北郷一刀？ 姓が北、名が郷、字が一刀か？」

「いえ、字はありません。姓が北郷で名が一刀です。」

「字が無い？ 珍しいな」

「俺にはこの名前です。」

「そうか、深くは聞かんさ。北郷、私の元に来る気はないか？」

いきなりであった。孫堅は唐突に話の流れを持って行ったのだ。

後ろで驚いている二人を無視して続ける。

「私はお前が気に行った、私の懐に迎え入れたいと思っている。」

「堅殿何を言われる！ こんな素性も解らぬ怪しい輩を招こうなどと！」

孫堅に突っかかる女性の言う事も最もだろう、と一刀は思う

「しかしだな祭、いくら自制がきいていない状態とはいえ伯符をあ
あも軽くあしらった力をどう見る？」

「それは…うむう…」

祭と呼ばれた女性はそこで口ごもってしまった、伯符と呼ばれていた少女は言葉を失ったままだ。数秒の沈黙の後に口を開いたのは一刀だった。

「俺は見聞を広めるために旅をしています。」

一刀の声に三人は顔を向ける、そこから孫堅達は視線をそらせなくなった。

呉の客将として仕え数秒前まで一刀に文句を言っていた祭も

先程までの会話で固まっていた雪蓮も

呉の王であるこの自分でさえもだ

目の前にいる一刀と言う少年は数秒前とは別人の印象を受ける、それもたった一言聞いただけで。

外見が変わった訳でも声色が変わった訳でもない、あえて言うなら空気か

一言声を発するだけで全ての人間を惹きつける、そんな声の『質』を感じた

声の質は重要だ。号令を発する時、兵達を鼓舞する時、舌戦の時、演説の時、謁見の時：例を挙げればきりが無い

声量や内容も必要だが何より一番必要なものは

『どのような人間も聞く態勢にさせる声の質』だ

声の魅力とでも言おうか、一声発するだけで話を聞こうと思わせてしまう

目前にいる一刀はそんな声質をしていた。

「この大陸がどんな状況なのか？、治めている人達はどんな人達なのか？」

一刀の言葉は続く

「自分は何ができるのか？、国は乱れるのか、そうでないのか、もし乱れた場合は仕官するのか、それとも」

続く言葉を三人は聞く

「乱れた国を憂いて起つのか」

その言葉は三人の耳に一際強く残った

「それを見極めたいと思っています、荊州にまで勇名が届く孫堅様にいきなり出会えるとは思いませんでした」

「それで、返答はどうなのだ？」

孫堅は一刀を促した

「二月ほど仕官する形でもいいのなら、お願いしたいと思います。」

「何をそんなふざけた事を！」

「そうよ！貴方一体何様のつもりなの！？」

雪蓮と祭は激昂してしまったが彼女達の主である孫堅は違った、大いに笑ったのだ

「面白い！本当に面白い奴だお前は！私に将来敵になるかも知れぬ者を育てると言うのか！」

「決まった訳ではないですが、結果そう取られてもおかしくない言い方でしたね。」

「お前を忠臣にするも敵にするも私達次第と言う事か：よし、その条件飲もう。」

孫堅の決定に他の二人は散々文句を言ったが孫堅の

「私が呉の王だ」

の一言で一蹴されてしまった

「ありがとうございます孫堅様」

臣下の礼を取った一刀に対し孫堅はこう言い放った

「二刀、私に対して様はつけないでいい。そして私の事は真名で呼べ、私の真名は『雪華^{せつか}』だ」

その時、森では二人の女の声が響き渡ったという。

孫堅（後書き）

何と言うか：勢いで書いたにしても酷過ぎる：（ ・ ω ・ ）

もう何話か書いたら改めて書きなおそうかと思えます。

黄蓋（前書き）

仕事が決まって色々やってたら時間が随分たってました…（・ω・）

今回入れて2回ほど戦闘回です也

黄蓋

壺

「ではこれより模擬戦を取り行う！」

雪華の一声にざわついていた周囲は静かになった

「北郷一刀、前へ！」

「はっ！」

ここは建業にある城内部の練武場、その中央に一刀は進み出る

どうして一刀はここにいるのか。

それは国の方針として雪華の一存ではそう簡単に迎え入れることはできないと言う事だった。

雪華以外の武将が猛反対したためとも言いが：

「だったら一刀の実力を皆の前で示せばいい、たとえ僅かな期間とは言えどもこの呉にとって有益な物をもたらす實力を持つと皆に認めさせればいい」

この一言に他の武将達は渋々頷くのだった。

「北郷よ、これから私が選んだ将三名と戦ってもらおう！」

練武場の周りには話を聞きつけてきた呉の将兵達が所狭しと立っていた

「私が選びし将達に全て勝利をおさめた場合はお前の進言を飲もう、もし誰か一人にでも敗北した場合はその命尽きるまでこの孫呉に尽くせ」

ざわ、と将兵達がざわつきはじめる。一度起こった波紋は広がり収まる事を知らない、それを止めたのは一刀の声だ

「了解しました、もし私が敗北した時、孫呉に生涯尽くす事をここにいる皆様の前と私の持つ二刀『爪』『雷』そして天の元に誓いましょう。」

一刀の腰にある二つの刀

打刀の名は『爪そと』

小太刀の名は『雷らい』

千歳が旅立つ際に与えてくれた名だ、二刀の名を一刀に伝えた時に千歳はこう言った

「一刀さん、その二刀の名はまだ完全ではありません。もし貴方がこの旅から無事ここに戻ってきた場合二刀の完全な名をお伝えします。」

深くは考えなかったが、きっと千歳は考えがあるのだろうと納得はしている。

その二刀を掲げ高らかに一刀は誓いの言葉を宣言した。

「いいだろう！その誓い忘れるな！」

「それでは始めよう！一人目、黄蓋よ前へ！」

「はっ！」

雪華の呼びかけに合わせて、一刀が見覚えのある女性が前へ進み出て来た

初めて見たときには弓を持っていたはずであるが今は剣を持っている

「お主の実力見極めさせていただく、儂本来の得物は弓じゃが今回は剣で行かせていただく。異存はないな？」

質素に造られた直刀を抜きながら黄蓋は言った

「はい」

一刀は『爪』を抜き、正眼の構えを取る

「俺の本当の始まりは多分ここからでしょう」

黄蓋は少し怪訝そうな顔をしたが、すぐに考えを改める事になる

「全力を持ってお相手します」

目の前にいる少年が『変わった』

孫策を組み伏せる所は見たが、この呉にもあれ位の事ができる者は数十人はいるだろう

何故孫堅が呉に何人もいる程度の実力者にあれほどの執着を見せるのか疑問に思っではいたが、いやはや我が主殿には頭が下がる

この少年は確かに呉にとって有益な人物になるだろう、孫堅と同じ気質を感じる。

「準備はいいようだな、それでは始めよ！」

そして一つ目の戦いが始まった

式

何合切り結んだだろうか、数は軽く二十は越えている。

黄蓋は昂っていた、一人の武人として自らの王と近しい気質を持った者と相対する事が何より嬉しく思う。

「楽しいのう！そう思わんか？」

黄蓋は笑いながら切りつける

「楽しんでる余裕なんてないですっ、よっ！」

言いながら一刀は受け流しつつ切り返す。

「ほっ、話す余裕はまだあるようじゃ。しかし、お主の剣はまこと不思議よの。」

黄蓋は感じていた。あの見た事も無い剣も奇妙ではあるが、一刀の剣技は不思議だ。

一見こちらの攻撃を一撃受けるだけで曲がってしまいそうな薄刃の曲刀は曲がらない、剣の反りを巧みに使い衝撃を逃がしているのだろう。先程から手ごたえがおかしい。

こちらの狙いが自然に外れていく

そんな感覚を受ける。何とも気持ちの悪い話ではあるが黄蓋はそう感じた。

「ふむ、このままではらちがあかんのう」

そう言うと黄蓋は戦い方を変えた。

重い…

一刀は黄蓋の一撃を受けながらそう思った

今までは手数は多かったが、多い分攻撃の重さは無かった

先程からは手数は少なくなったが、その分速さと重さが加わり少しばかり厄介になった。

少しでも受け損ねると剣が曲がりかねない、この時代には日本刀など存在しないだろうし直す事も出来ないだろう。

しかし一刀は焦らない、焦りから出た行動はいい結果をもたらす事は無いと知っているからだ。

だがこのままの状態が続くのはよろしくない。

そこで一刀は虎口に飛び込む覚悟を決めた。

その事に黄蓋が気付いたのは何度か打ちこんだ後だった。

先程から一刀の切り返しが無い、防御一辺倒になっている。

しかし目は生きている、何かを狙う目だ。

おそらく一刀は勝負に出たのだ、何を考えているかは解らないがきっとそうだろう。

「面白いぞ北郷、その勝負のってやろう！」

言って、黄蓋は渾身の力と速度を持って一刀に斬りかかった。

その一撃を一刀はこの勝負で初めて受けなかった、避けたのだ。

そして次の瞬間

「なっ！」

一刀が大きくなった

それが一刀が目の前に近づいてきたと理解したときにはもう遅く、首筋にひんやりとした物があつた。

「ふむ…儂の負けのようじゃの」

黄蓋は微笑みながら一刀に言う。

「俺の勝ち…ですね」

一刀は笑みを返した、

「そこまでだ！」

雪華の声に反応する形で一刀は『爪』を下げた。

「ありがとうございました黄蓋さん」

「祭でよい」

「え…？」

「儂の事はこれから祭と呼ぶがよい、それが儂の真名だ」

言って祭は剣を担ぎ直し雪華の元へ去って行った。

その姿を見つめる二人がいる。

「雪蓮、最後の一合見えたか？」

「何となくはね、でも完全にとらえる事は出来なかったわ…」

孫策と周瑜だった

「ふむ、雪蓮でもとらえきれなかったのか…厄介だな」

「でも、面白くなってきたじゃない」

「面白い？」

「私もあの北郷って奴欲しくなってきたやつた」

孫策は言いながら一刀をじっと見つめているのだった。

黄蓋（後書き）

今回は三戦の内の一戦目です。

真恋姫で一刀の特訓のために祭は剣を使っていました。

その流れでこんな感じになったんですが：

いやはや：一刀強いねえ W W W

書いてる張本人が言うなって感じですがね W

さて次回は猫と虎の出番でございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9034t/>

真・恋姫?無双 中華統一

2011年10月9日00時24分発行